

室町幕府の政治と宗教

大田 壮一郎 著

塙 書 房 刊

大田 壮一郎 (おおた そういちろう)

略 歴

1976年 広島県に生まれる。
1998年 立命館大学文学部史学科卒業
2005年 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了
立命館大学・龍谷大学ほか非常勤講師をへて
現 在 奈良大学文学部専任講師
大阪大学博士 (文学)

主要業績

「初期本願寺と天台門跡寺院」(大阪真宗史研究会編『真宗教団の構造と地域社会』清文堂出版、2005年)
『伊賀市史 第4巻 資料編古代・中世』(伊賀市役所 2008年)
〔共著〕
『伊賀市史 第1巻 通史編古代・中世』(伊賀市役所 2011年)
〔共著〕
「安国寺・利生塔の設置と地域・守護—伊賀国を事例に—」(『佛敎史研究』48、2012年)
「聖一派永明門派の伊賀進出と北条得宗庶流家—伊賀安国寺前史—」(『鎌倉遺文研究』30、2012年)
「中世後期の本末関係と末寺支配—大徳寺を事例に—」(井原今朝男編『生活と文化の歴史学3 富裕と貧困』竹林舎、2013年)

むろ まち ぼく ふ ぜい じ しゅうきょう 室町幕府の政治と宗教

2014年2月28日 第1版第1刷

著 者 大田 壮一郎

発 行 者 白 石 タ イ

発 行 所 株式会社 塙 書 房

〒113 東京都文京区本郷6丁目8-16
-0033

電話 03(3812)5821

FAX 03(3811)0617

振替 00100-6-8782

亜細亜印刷・弘伸製本

定価はケースに表示してあります。落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

©Souichiro Ota 2014. Printed in Japan ISBN978-4-8273-1264-5 C3021

序 本書の構成

本書は、室町幕府と宗教の關係について論じるものである。その目的は、日本中世の政治と宗教をめぐる歴史の一段階に、室町幕府の宗教政策を位置付けることにある。これまで、中世の政治と宗教をめぐる問題は、中世成立期を中心に論じられてきた。その結果、院権力に代表される公家政権の宗教政策について、多くの研究成果が生み出された。一方、武家政権が主導権を握る中世後期については、禪宗史の分野を除いては研究蓄積が乏しく、基礎的な事実關係すら共有されていない。中世前期から中世後期への展開を解明するためには、まず中世後期の武家政権すなわち室町幕府と宗教の關係を明らかにする必要がある。

これまで、室町幕府と宗教の關係といえば、五山十刹の官寺制度や幕府財政と五山領の關係など、もっぱら禪宗について論じられてきた。近年の研究では、禪宗は菩提寺や葬送仏事など將軍家との宗教的關係を独占し、鎮魂や祈雨などの社会的機能も担ったとされる。こうした禪宗の台頭は、中世前期に権門として社会的・政治的影響力を誇った顕密諸宗の衰退を前提に理解されている。ただし、それは実態面の分析から導かれたものではなく、たとえば莊園制の崩壊に伴う顕密仏教の退廃・墮落など、印象論的な評価に過ぎない。近年の莊園制研究によれば、莊園制を基盤とする社会構造は、形を変えつつも中世後期に継続していたという。また、將軍家一族の多くは南都北嶺や真言系の門跡寺院に入室し、それらの門跡寺院は室町幕府の祈禱体制の一翼を担っていた。このように、史料に即して検討してみれば、禪宗の發展は必ずしも顕密仏教の単純な衰退を示すものではないことがわ

かる。とするならば、室町幕府の宗教政策の全貌は、対五山禪宗だけではなく、顕密仏教との関係も含め具体的に検討しなくては解明できない。

こうした研究状況を踏まえ、本書は二つの視座から室町幕府の宗教政策を論じる。まず本書前半では、延暦寺や石清水などの大寺社や、大覚寺・三宝院などの門跡寺院と幕府との関係について、祈禱を題材に検討する。中世宗教の国家的機能を代表する攘災や調伏は、修法や法会などの祈禱として行われた。したがって、祈禱は中世政治権力と宗教の関係を最も直截かつ具体的に示す事象と言える。そこで、とくに鎌倉幕府の祈禱体制との継承関係や、政治構造の変容に連動した祈禱編成の変化を検討することにより、室町幕府の祈禱政策の諸段階を明らかにする。

本書の後半では、近年とみに注目されている室町殿権力の宗教的側面を論じていく。まず、室町殿（足利将軍家家長）を首班とする公武政権の確立に伴い、将軍家の追善仏事が公武共同による室町殿の地位確認の儀礼に変質していくことを指摘する。また、室町殿を核とする在京大名・公家・寺社など中央領主社会の交流が、分国寺社政策である地域寺社の興隆と連動したこと、また地域寺社側も中央の動向を意識していたこと、などを明らかにする。これらの事例から、中央の大寺社だけでなく、地域の寺社も室町殿権力の政治構造と不可分であったことを論じる。

最後に本書の総括として、公家政権下で構築された中世前期の国家と宗教の関係が、中世後期に至ってどのように変質したのかを提示する。以下、各章の構成と概要を示す。

序章「室町幕府宗教政策論」では、中世後期宗教史研究のあゆみと論点の整理を行い、室町幕府の宗教政策を

論じる意義と方法を提示する。

第一部「室町幕府の祈禱と門跡」では、室町幕府と権門寺院との関係を明らかにすべく、武家祈禱体制の実態やその歴史の変遷について論じる。武家祈禱（武家が催す祈禱を指す）の問題は、公武関係史研究の影響で祈禱主宰権の所在に関心が集中したが、ここでは室町幕府の宗教政策としての位置付けを試みる。

第一章「大覚寺門跡と室町幕府」では、皇統の名称となったことで南朝方寺院と理解されてきた中世の大覚寺について、内乱当初に北朝方と南朝方の二人の大覚寺宮が存在したことを指摘する。その上で、武家祈禱体制や法流相承の実態から、大覚寺は一貫して北朝・幕府方の寺院として活動していたことを明らかにする。

第二章「足利義満の宗教空間」では、足利義満の「王権」掌握を示す事例として知られる北山第における大規模祈禱の開催が、国家的祈禱というより義満護持を目的とする「私的」祈禱であることを指摘し、北山殿義満時代は幕府の宗教政策における到達点ではなく、むしろ特異な時期と評価する。

第三章「足利義持政権と祈禱」では、反義満的な政策志向とされる義持政権を宗教政策の視点から再検討する。具体的には、義持初政が北山殿時代の義満を否定し、室町殿時代の義満に準拠する方針であったことを明らかにする。また、「神仏依存」と一括りにされる義持政権の特色について、その初政期と後半期の方針の違いを明確にし、その背景を検討する。

第四章「室町殿の宗教構想と武家祈禱」では、幕府成立時点から義満期までを発展過程と描いてきた武家祈禱研究を相対化し、鎌倉幕府期の祈禱との連続性や関東鎌倉府との関係を明らかにする。また、武家護持僧がもつばら注目されてきた武家祈禱体制が、公武政権の構造に即した諸門跡と武家護持僧の二重構造に編成される経緯とその意義を論じる。

第二部「室町殿権力の構造と宗教」では、近年の政治史研究の進展により実像が明らかとなりつつある室町殿権力において、宗教政策がどのように機能したのか検討する。

第一章「室町幕府の追善仏事に関する一考察」では、室町幕府による歴代将軍の追善仏事が、公家の仏事構成を規範としたことを指摘する。また、武家八講の実施状況を網羅的に検証し、室町期以降の武家八講が室町殿の地位継承を確認する公武共同の儀礼として催されたことを明らかにする。

第二章「足利義持の神祇信仰と守護・地域寺社」では、大内氏・細川氏・京極氏ら在京大名の分国寺社政策を事例に、守護による分国寺社興隆の実施が、室町殿を核とする在京領主社会と連動していたことを明らかにする。それを踏まえ、これまで個性と捉えられてきた義持の神祇信仰を、室町幕府―守護体制下の宗教政策として位置付ける。

第三章「摂津国勝尾寺と足利義持政権」では、一国内の地域権力との関係が注目される中世後期の地域寺社について、摂津国勝尾寺の事例から、地域寺社が将軍の代替わりや信仰姿勢など、中央の動向にも敏感に反応していたことを論じる。

終章「室町殿と宗教」では、第一部・第二部の各章を踏まえ、院政期以来、国家と密接な関係を有してきた顕密仏教が、中世後期に至り室町殿権力の下でどのような位置を占めたのか総合的に検討し、本書の総括とする。

なお、本書は独立行政法人日本学術振興会平成二十五年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて刊行された。

目
次

序 本書の構成

序 章 室町幕府宗教政策論……………三

はじめに……………三

第一節 中世宗教史研究の射程……………四

1 中世宗教史研究の軌跡……………四

2 宗教史研究における中世後期……………五

3 武家政権の宗教政策論……………八

第二節 室町幕府の宗教政策をみる視点……………三

1 武家祈禱研究の課題……………三

2 室町期国家と諸宗……………六

おわりに……………六

第一部 室町幕府の祈禱と門跡

第一章 大覚寺門跡と室町幕府……………七

はじめに……………七

第一節 内乱期の¹大覚寺と大覚寺統……………七

1 大覚寺をめぐる叙述……………六

2 二人の大覚寺宮	四〇
第二節 大覚寺門主と後宇多院法流	五〇
1 後宇多院による大覚寺興隆	五〇
2 後宇多院法流相承の展開	五一
第三節 室町期の大覚寺門跡	五八
おわりに	六〇
第二章 足利義満の宗教空間——北山第祈禱の再検討——	七五
はじめに	七五
第一節 北山第祈禱の構造	七七
1 北山第の様相と先行研究の評価	七七
2 もうひとつの北山第祈禱——廻祈禱について——	七八
3 北山第大法の性格	八三
第二節 北山第祈禱の歴史的位置	八三
1 武家祈禱の展開過程	八三
2 武家追善仏事の展開過程	八六
おわりに	九一
第三章 足利義持政権と祈禱	一〇七
はじめに	一〇七

第一節 義持初政をめぐる	108
1 前提としての「北山殿」義満期	108
2 義満没後の動向	110
3 宗教政策からみる義持初政の位置	117
第二節 義持期の公武関係と祈禱政策	118
1 義持期の公武関係と祈禱	119
2 祈禱対象の増加	120
3 義持の出家	123
おわりに	123
第四章 室町殿の宗教構想と武家祈禱	133
はじめに	133
第一節 顕密仏教界の変動と武家祈禱	133
1 初期室町幕府祈禱の性格	133
2 鎌倉府祈禱体制の展開	136
第二節 武家祈禱体制の転換と三寶院	140
1 三寶院台頭の前提	140
2 観応の擾乱と賢俊の動向	144
3 武家祈禱の変容	150

第三節 室町殿の祈禱編成……………	一五五
1 北山第大法と義満期の祈禱構造……………	一五五
2 諸門跡・護持僧祈禱の展開……………	一五九
おわりに……………	一六三
第二部 室町殿権力の構造と宗教	
第一章 室町幕府の追善仏事に関する一考察——武家八講の史的展開——……………	一七七
はじめに……………	一七七
第一節 武家追善仏事の基本構成……………	一七九
1 武家追善仏事の編成原理……………	一七九
2 武家八講の開催条件とその意義……………	一八二
第二節 武家八講の成立と展開……………	一八九
1 南北朝期の武家八講……………	一八九
2 義満期の「復興」……………	一九一
3 相国寺「大八講」の開催……………	一九三
第三節 「公武儀礼」としての武家八講……………	一九六
1 八講奉行体制の変容……………	一九六
2 武家八講の国家的位置……………	二〇一
おわりに……………	二〇四

第二章 足利義持の神祇信仰と守護・地域寺社	二二五
はじめに	二二五
第一節 有力大名と分国寺社の興隆	二二七
1 豊前国宇佐八幡宮と大内氏	二二七
2 讃岐国白峯寺・琴弾八幡宮と細川氏	二三三
3 出雲国日御碕社と京極氏	二三七
第二節 義持文化圏	二四〇
おわりに	二四三
第三章 摂津国勝尾寺と足利義持政権	二四九
はじめに	二四九
第一節 高山庄をめぐる勝尾寺・浄土寺相論と義持初政	二四一
1 応永十五年の一円知行化	二四一
2 相論の前史——勝尾寺と浄土寺の関係——	二四三
3 相論の展開——後醍醐・内乱・悪僧——	二四三
4 応永相論と室町殿の徳政	二四六
第二節 勝尾寺の将軍家祈願寺化と後期義持政権	二四六
1 将軍家祈願寺の認定	二四六
2 金剛乘院俊尊	二五一
3 勝尾寺をめぐる二つの信仰と義持	二五四

おわりに	二六三
終章 室町殿と宗教	二七一
はじめに	二七一
第一節 内乱の展開と顕密体制	二七四
1 内乱と武家祈禱	二七四
2 北朝・幕府と公家仏事	二七六
3 天皇・王家の変質と顕密仏教儀礼	二八二
第二節 室町殿権力の宗教編成	二八五
1 権門寺社政策の転回	二八五
2 門跡の編成とその意義	二九一
第三節 相国寺仏事の意義	二九五
第四節 室町期国家と地域寺社	二九八
1 十五世紀前半の本末関係と祈願寺・勅願寺	二九八
2 地域寺社造営と在京領主社会	三〇二
おわりに	三〇四
初出一覧	三五
あとがき	三七
索引	卷末

室町幕府の政治と宗教

序章 室町幕府宗教政策論

はじめに

「中世仏教は顕密仏教である」——戦後歴史学と共に歩んできた鎌倉新仏教論は、今や中世仏教論として議論に上ることはほとんどなく、かつて「旧仏教」と否定的に呼ばれた顕密仏教がその主役の地位を占めている。ここ半世紀の間で、中世仏教論ほどその内容が劇的に変化した分野もないだろう。その変化は仏教史という一分野に止まらず、中世史全体に大きな影響を及ぼした。

だが、ここに一つ疑問がある。中世仏教論における「中世」とは、いったいどの範囲を指すのだろうか。一般に、中世の範囲とは院政期から戦国期の間と捉える向きが大勢だろう。しかし、鎌倉新仏教論に代表されるこれまでの研究は、院政期前後からせいぜい鎌倉期前半までを対象としてきた。つまり、仏教史における中世は、鎌倉時代で終わっているのである。その鎌倉新仏教論を批判し、旧仏教（顕密仏教）こそ中世仏教である、と論じたのが顕密体制論であった。しかし、鎌倉新仏教論が中世後期を世俗化・体制化の時代としてしか描けなかったのと同様、顕密体制論とそれ以後の研究も、中世後期への関心は極めて低い。どの時点まで中世仏教と考えるのか、その後は室町仏教なのか戦国仏教なのか、あるいは近世仏教なのか。中世前期の宗教史が盛んに議論される一方で、こうした論点は棚上げにされてきた。本章では、このような現状に至った経緯と、その克服に必要な視